



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.35 / Spring 2016

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第 35 号をお届けします。第 19 回大会の概要についてのお知らせがあります。

★新会長メッセージ

<新体制の船出にあたって>

加藤 重広(北海道大学)

昨秋のこと、運営委員会のメーリングリストが配信され、自分が会長に選出されたことを知ったのは、うららかな九月下旬のある日の午後でした。最初、どういう事態か飲み込まず、徐々に状況を理解できるようになってはたと考え込んでしました。

「はからずも会長に選出された」などというのは、単純に謙虚な物言いなのだと思いますが、私はまったく予想してもおらず、選挙結果を知ってかくのごとく驚いたのです。学識に乏しいことは今更白状するまでもありませんが、学会の会長といった要職は「おじいさん」の先生がなさるといふ先入観があり、確かに自分に若々しさはないけれども少し前に五十代になったばかりで、「おじいさん」という自覚がなかったのです。こういった経緯で、今年度より来年度まで、学会長として選出された、北海道大学の加藤重広です。どうぞよろしく願いいたします。いまだ修練は不足しておりますが、それ

でもおじいさんとしての自覚は徐々に出てきております。

さて、ご挨拶も兼ね、学会の現状について少し述べさせていただきます。日本語用論学会は、1998年10月に設立の呼びかけがなされ、同年12月5日に第1回大会を開催しました。よって、今年度開催の大会は第19回となり、来年度には第20回記念大会を開催する予定です。設立に関する詳しい経緯は、『語用論研究』11に掲載された、澤田治美・余維「日本語用論学会10年の歩み」にあり、これは学会のウェブサイトでも見ることができます。読むと当時の熱気が生き生きと伝わってきます。

今は、設立時期に生まれた人たちがそろそろ大学生になろうかという頃にあたりますから、相当な時日が経過したことは間違いありません。そして、本学会も、そろそろ新しい段階にさしかかっていると私は感じています。というのも、これまでの故小泉保元会長、澤田治美元会長、山梨正明元会長、林宅男前会長は学会設立時の創設メンバーですが、私はそうではありません。記憶があまり正確ではありませんが、私が入会したのは今世紀になるかならないかのころだったと思います。

これまでの会長が学会創設に尽力され、設立時の意気込みや熱気をよくご存じだったのとは違い、私は創設時の次の世代ということになります。また、学会そのものも設立から二十年近く経ち、一人前として独り立ちしていく段階にさしかかっているようにも思います。前世紀末

から今世紀に移りゆく時期のような、大学院重点化などで大学院生が増え、若い会員がどんどん入会してきた時代ではなくなりつつあります。ちょうど日本社会が人口減少の局面に突入する時期とも重なり、安易に薔薇色の未来を夢見る状況でもなくなってきました。こういう社会状況下で、学会としての社会的責務を果たしつつ、学会を組織として維持していくには、知恵が必要です。若さと勢いは徐々に失われていきますが、これまでの経験と知恵で難局を乗り越えていくしかありません。語用論学会は、同時期に設立された中規模の他学会とともに、知恵を持って先に進むべき新しい段階への移行期にあると思うのです。

学会のような組織も、それを構成する個々の人間も、特定の時代のなかに存在していますから、そのときどきの思潮や風潮に影響を受けているものです。現代であれば、「持続可能性」と「グローバル/ローカル」が挙げられるかと思えます。私たちは資源を使いながら生きていますが、資源は有限で、使うことで「利用価値のある資源」から「利用価値を失ったもの」へと転じます。こういった発想はエントロピーなどずいぶん昔からありましたが、このまま資源を浪費しては人類は長く続かないだろうという、身に迫る実感があってはじめて危機意識が生じます。見通しをもって効率的に営まなければ、末永く続けることは難しいでしょう。これは先ほど述べた、日本の社会状況と関わる学会運営のあり方に関わります。

もう1つの「グローバル」と「ローカル」のバランスは難しい課題でもあります。研究そのものは孤独な作業ではありますが、その成果は学術のコミュニティの中で受容され、評価され、知見や実績として蓄積されていく必要があります。学会はそのコミュニティを成立させる上で重要な役目を持っています。

語用論学会は、これまで毎年海外から欧米の第一線の研究者を招き、大会における基調講演や学会誌『語用論研究』への特別寄稿をお願いしてきました。海外からの発表応募や論文投稿も増え、英語発表もほぼ安定してある程度の件数が行われるようになっていきます。これらはグローバル化として捉えることができます。PSJが窓口になって海外のコミュニティとつながる役目を果たしてきたと言えるでしょう。現在、中国・韓国・台湾など東アジアで語用論の学術交流を行うための準備を進めていますが、相対的に近くではあれ、これもグローバル化であり、第20回大会に向けて準備を進めています。

「ローカル」な活動という点では、全国をブ

ロックごとに分けて研究会などを支援してはいますが、活動実績や活発さには地域差があります。加えて、英語がわからないと語用論学会に行ってもよくわからない、つまらない、という声もあると聞いていますが、日本語学・日本語教育・社会言語学などと連携した、内向き（ドメスティック）な関心もローカルな面に含めると、いろいろと工夫する余地があると思います。

以上の課題は難しく大変なものとも言えますが、工夫の仕方語用論学会をよりよい方向に改善できる余地があると、ポジティブに考えることにしたいと思います。学会を意義あるものにしていくには、会員みなさんのご理解とご協力が不可欠です。まだおぼつかぬ足取りで歩き始めたばかりの新体制ですが、できることから対応していきますので、どうぞご期待ください。

今年の大会は、12月10日（土）・11日（日）に下関市立大学で開催する予定です。私自身、山口県は幾度か訪れておりますが、下関は通過したことしかなく、はじめて降り立つことになるので楽しみにしております。おいしいものも見所も多いと聞きますが、個人的には十年ほど前の「カーテンコール」という映画の舞台が下関で、（映画のロケは対岸の北九州市だったようですが、）一度じっくり見て回りたいと思っております。大会の前後はあまり時間に余裕はなさそうなので、別の機会をつくれなにか思案しています。

多くの会員・非会員の参加を得て、有意義な大会になるよう準備を進めています。詳しくは大会の告知をご覧ください。

新年度になってまもなく熊本県・大分県を中心とする「平成28年熊本地震」が発生し、多くの犠牲者・被災者が出たと報道されています。被災された方、また、犠牲者のご遺族には心よりお見舞いを申し上げます。語用論学会では被災会員の会費などを免除する措置をすでにとっておりますので、該当する方は状況が落ち着きましたらご連絡をお願いします。本稿を書いている段階ではまだ完全に収束したとは言えない状況にありますが、一日も早く復旧が進むよう念じるしかありません。

* 日本語用論学会第19回大会ご案内 *

2016年度の第19回大会は、以下のとおり、下関市立大学での開催となります。会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。

なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次 HP で更新していきますので、ご確認ください。

◆日時・場所 2016年12月10日(土),11日(日)
下関市立大学

◆大会テーマ:「語用論と文化 (Pragmatics and Culture)」

◆基調講演者: Gunter Senft 氏(マックスプランク心理言語学研究所主任研究員) 著書: Understanding Pragmatics (Routledge, 2014) Systems of Nominal Classification (CUP, 2000)、他多数 <http://www.mpi.nl/people/senft-gunter>

◆シンポジウム:「認知言語学と語用論は文化差をどのように捉えるか」

登壇者(予定): Wen-yu Chiang 氏(台湾国立大学) 今井むつみ氏(慶応義塾大学) 林誠氏(名古屋大学) Gunter Senft 氏(Discussant)

◆ 発表募集

発表言語は日本語と英語の両方で、発表形態は、今まで通り、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です。なお、ワークショップにつきましては、一つのテーマについて様々なアプローチとから深く検討し研究者の交流が図れる良い機会でもあり、今後も一層促進していきたいと思っておりますので、皆様是非奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に応募要領を示します。

公募日程は下記の通りです。

- 投稿締め切り 2016年7月22日(金)
- 採否通知 2016年9月下旬
- 大会 Abstract 原稿締切
2016年10月14日(金)
- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切
2017年3月31日(金)

①発表形態

- 1) 口頭発表: 発表 25分+質疑応答 10分
- 2) ポスター発表: 1時間 (掲示時間)
- 3) ワークショップ: 1時間 40分、特定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募(ワークショップは団体発表のみとなります)。

②発表言語: 日本語もしくは英語。

③発表申し込みについて

オンラインでの投稿のみになります。投稿受付サイトは6月中旬に開設予定です。オンライン投稿の方法はホームページ上で後日紹介します。

<申し込み原稿の形式>

申し込み原稿の体裁: 発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ体裁となります。

用紙サイズ: A4

規定文字数: 日本語2,500字以内、英語500 words 以内。(参照文献は文字数の制限に含めません。)

ファイル形式: Microsoft Word形式 (doc, docx)、PDF形式(pdf)

- ・氏名と所属は記入しないでください。
- ・発表タイトルの後に、一行空けて本文を記入してください。
- ・ワークショップは、全員分の要旨を規定文字数以内に取りまとめてください。
- ・参照文献のフォーマットは『語用論研究』に準じます。
- ・また、規定から逸脱した形式、ファイルで応募した場合は、不採用となることがあります。

<申し込み原稿の留意事項>

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。また、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・問題となる現象
- ・その現象についての先行研究と問題点現象の分析に用いるデータ
- ・現象の分析方法
- ・現象の分析結果
- ・分析結果に基づく結論と理論的含意

<申し込み制限>

一人の会員が申し込みできるのは一大会につき2件まで(Workshopを「含む」)です。ただし、このうち第一発表者(またはWorkshopのCoordinator)として申し込みできるのは1件に限られます。

<二重投稿の禁止>

口頭発表・ポスター発表・ワークショップへの発表申し込みにおいて、二重投稿を禁止します。大会運営委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みを受理せず、また次年度の大会での、当該の申込者を発表者に含む発表申し込みを受理しません。

※1.二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表の申し込み中である内容、また、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込みをすることです。

※2.学士論文、修士論文、博士論文は、まだ公表・出版されていない場合には、「学術的刊行物」に含めません。

※3.既に学会の発表や学術的刊行物への応募で不採択が決定している内容での申し込みは、二重投稿に含めません。

◆ 申し込み資格

発表の申し込みは会員に限ります。第一発表者が会員でない場合、必ず申し込みと同時に入会の手続きが必要になりますのでご注意ください。

◆ 選考結果について

選考結果は9月下旬に第一発表者に通知します。

◆発表会場に現れない、もしくは、ポスターを貼ってあるだけで説明員がまったくいない」などのいわゆる"No Show"に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会運営委員会に無断で発表を行わない、もしくはポスターの掲示のみで説明を行わない場合に、これらを"No Show"とみなし、本学会のホームページにて公表します。ただし、事前もしくは当日に、また、やむをえない場合には事後に、発表を行えなかった合理的な事情の説明があった場合には、「キャンセルされた発表」とみなします。

◆ 問い合わせ先

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp (大会運営副委員長・野澤 元 宛)

投稿に関するお問い合わせは、7月15日(金)までお願いします。

<2016 年度年次大会会場・下関市立大学への交通・宿泊について>

[交通について]

【1】新幹線をご利用の場合、新下関駅で下車してください。その後、

(1)新下関駅前からサンデンバス2番、川中豊町線に約20分乗車、大学町二丁目バス停で下車、徒歩約2分で下関市立大学です。学会当日は大学町二丁目バス停に学生役員が立ち、案内します。また、新下関駅前からタクシーを利用した

場合、下関市立大学までは1500円程度です。

(2)新下関駅でJR山陽線に乗り換え、2駅目の下関駅で下車、下関駅前3・5番のりばからサンデンバスに約30分乗車、山の田バス停で下車、徒歩5分で下関市立大学です。学会当日は山の田バス停に学生役員が立ち、案内します。下関駅からのバスは本数が多く出ていますので、時刻表は現地でご確認ください。

【2】飛行機をご利用の場合

(1)山口宇部空港からはバス(約75分)で下関駅まで来てください。下関駅からは上記【1】(2)を参照。

(2)北九州空港からはスターフライヤー便をご利用の場合、事前予約の上、乗り合いタクシーで(約60分)で下関市立大学まで直行できます。

[宿泊について]

新幹線・新下関駅周辺はあまりホテルがありません。JR下関駅周辺のホテルまたは下関市街中心地の唐戸周辺のホテルをご利用ください。唐戸はバス路線で下関駅と下関市立大学の中間に位置します。例年混み合いますので、予約は早めをお願いします。場合によっては北九州市小倉または門司港のホテルをご利用ください。

研究会コーナー

◆ メタファー研究会

メタファー研究会は、語用論学会の研究会として昨年度の運営委員会でお認めいただきました(2015年12月6日、名古屋大学)。この第一回研究大会をキックオフミーティングと称し、2016年3月17日(木)10:00-17:45 関西大学千里山キャンパス A601教室で行いました。参加者は124名、懇親会にも多数ご参加いただき盛況でした。プログラムは以下の通りです。

総合司会：谷口一美(京都大学)

研究発表 「時間メタファーにおける評価性」
鈴木幸平(関西看護医療大学)、「日本語 Moving Observer型メタファーの適切性と表現性について」
大神雄一郎(大阪大学[院])

レクチャー「脳科学とメタファー」鍋島弘治朗(関西大学)、「会話分析とメタファー」杉本巧(広島国際大学)、「語りの構造とメタファー」片岡邦好(愛知大学)、「関連性理論とメタファー」内田聖二(奈良大学)

講演「メタファーの認知過程：三島由紀夫の作

品世界に基づく検討」楠見孝（京都大学）

講師の先生方、お越しいただいた皆様に感謝いたします。次回、7/2に京都大学で研究例会を開催いたしますのでご興味のある方はぜひいらしてください。

☆海外学会との交流について

海外の関係学会との交流を促進するという趣旨で、中国や台湾との交流が始まっています。その一つとして、昨年末に中国語用論学会からお招きをいただき、本学会の久保進理事に参加いただきました。詳細は、以下の報告をご覧ください。

なお、これを受けて、本年の年次大会へ中国語用論学会から研究者をお招きする予定です。交流促進に向け、「特別招待発表者」として相互に宿泊代等を負担しあうことも運営委員会で承認されておりますことを申し添えたいと思います。

（山本英一、前事務局長）

第14回全国語用学検討会 (The 14th China Pragmatics Conference) 兼 第8回中国語用論学会年次大会 (The 8th CPrA Annual Meeting) 参加報告 理事 久保進

2015年10月23日より26日まで、中華人民共和国合肥市にある安徽大学外国語学院で、「語用学界面研究 (Pragmatics and Its Interfaces)」をテーマに開催された中国語用論学会年次大会に日本語用論学会より派遣された。中国語用論学会 (CPrA) は、毎年全国規模の語用論検討会を開催しているが、併せて、年次大会を隔年で行っている。昨年の大会は、両者を兼ねた大会であり、中国全土から、著名な研究者が多数参集した。参加者の具体的数字は尋ねそこねたが、全体会合では500人は入る安徽大学の講堂がほぼ満員になっていた。大会期間の主な行事は以下の通りであった。

10月23日は終日、中国全土より参加の参加者の受付、そして、夜は、盛大な歓迎晩餐会が行われた。10月24日は、午前中に開会式とその後9時より昼前まで Kasia Jaszczolt ケンブリッジ大学教授、何自然 広東外国語大学教授 (代読)、陳新仁 南京大学教授らの4件の招聘講演を聴いた。午後は英語発表の分科会に参加した。プログラムでは Jaszczolt 教授、Kadar 教授が評者となっていたが、司会の思い込みと両教授からの招きで久保も評者として参加し講評を分担した。夜は再び晩餐会。25日は朝の8時から昼過ぎまで Daniel Kadar 教授、張克定教授、文皓教授らの7件の招聘講演を聴いた。久保は、Kadar 教授の *The Metapragmatics of Politeness* という題目の講演に質問を行った。午後は久保が

Pretense and Pretending: a Regulation Theoretic Account という題目で招聘発表を行った。夜は又々晩餐会。26日は、終日各地に帰る研究者とのおお送りをした。全体として、この学会は活気にあふれており親しみやすく参加をしてみても得るものがたくさんあった。私の発表や若手の研究者へのコメントの後、数多くの研究者と意見交換する機会を持つことができた。学会の開催校である安徽大学の大会の運営も申し分なかった。

最後に招聘発表者として大会に参加する機会を作ってくださった、本学会の林宅男前会長、山本英一前事務局長、中国語用論学会の Xinren Chen (陳新仁) 現会長、Zhan Quanwang 安徽大学外国語学院副院長、併せて、語用論学会運営委員会の先生方にお礼を申し上げておきたい。次回の大会は、2017年に北京で開催の予定である。日本語用論学会から多くの方が参加されることを切に願っている。



《事務局より》

日本語用論学会 会員の皆様

このたびの平成28年熊本地震で被災された、本学会会員を含む、すべての皆様に心からお見舞いを申し上げます。

日本語用論学会では、被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただいたことにより「2016年度会費」ならびに「2016年度年次大会 (2016年12月) の参加費」を免除させていただきます。

被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈りしております。

会費・学会参加費免除 申請先 (メール、郵送、電話のいずれも可、まずはご連絡いただきましたら手続きの詳細をご連絡させていただきます。)

日本語用論学会事務局

〒606-0847

京都市左京区下鴨南野々神町1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英
語英文学科 小山 哲春 研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

Phone: 075-706-3670

★ 平成 27 年度 (2015 年度) 大会会計報告

収入	
年会費	111,000
大会参加費	514,000
懇親会費	290,000
収入計①	915,000
支出	
印刷費	356,400
郵送費	101,761
人件費	201,600
文具費・掲示物製作費	72,466
講師経費(謝金・旅費等)	342,122
懇親会	270,100
施設使用料	226,576
支出計 ②	1,571,025
①-②	▼656,025

学会ホームページ、サーバーサービス関連費	13,026
事務局諸費	721,555
人件費(学生アルバイト等)	271,022
会議費	102,872
文具費・掲示物作成費	72,656
学会運営活動に対する交通費等補助	260,620
その他(手数料など)	14,385
会員管理業務委託費	415,387
会員管理システム利用費	188,373
地区研究会運営費	10,000
言語系学会連合会費	20,000
講師渡航費・謝金等(5名)	365,082
懇親会	270,100
施設使用料(名古屋大学)	226,576
合計	4,511,135

次年度繰越金 4,080,967

★ 平成 27 年度決算報告(案)

収入	前年度繰越残高	5,108,794
年会費(540口)		2,619,000
一般	439口(@5,000)	2,195,000
学生	91口(@4,000)	364,000
団体	10口(@6,000)	60,000
大会参加費(2日分、225口)		514,000
現会員・新入会員	161口(@2,000)	322,000
当日会員	64口(@3,000)	192,000
懇親会費(77口)		290,000
一般	59口(@4,000)	236,000
学生	18口(@3,000)	54,000
大会論文集		19,500
その他(『語用論研究』印税等)		40,808
合計		8,592,102

支出

印刷費(大会プログラム・プロシーディングズ・ 学会誌(第16号・第17号)等)	1,874,376
郵送費	406,660

★ 会費納入のお願い

◆会費未納年度がある場合、払込取扱票を同封させていただきます。年会費は、一般会員5,000円、学生会員4,000円、団体会員6,000円でございます。11月までに、ご納入いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。行き違いでご入金済みの場合は、ご容赦ください。

- 同封の払込取扱票をご利用の場合：
郵便振替口座：00900-3-130378(ゆうちょ銀行)
口座名：日本語用論学会
- ATMから振り込まれる場合：
ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：
0130378 口座名：日本語用論学会
- ATMから銀行口座へ振り込まれる場合：三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546
口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎
- クレジットカードをご利用の場合：
学会ホームページの「会員用ページ」より、クレジットカード決済も可能でございます。

★《新刊・近刊案内》

■『言語の主観性——認知とポライトネスの接点』
小野正樹・李奇楠編 くろしお出版（定価3,400
円＋税）

言語における主観とは個人レベルの私的なものではなく、ある言語集団の中で共有される認知プロセスとして捉える必要がある。また、それを表現し、人に伝えようとする時には、これも言語集団の中で慣習化されたポライトネスという対人表現技法がある。本書はこのように各言語における主観性を認知とポライトネスの観点から解明を図ることを目的として、日本語・中国語・韓国語・英語の研究者11名が各言語における具体的な言語現象とその意味構造の記述に取り組んだものである。（2016.6.5刊）

■『サイコセラピー臨床言語論——言語研究の方法論と臨床家の言語トレーニングのために』加藤澄著 明石書店（定価4,600円＋税）

本書は、(1) クライアントの言語行動からセラピーに必要な情報をどのように読み取るか、(2) クライアントから有用な情報を引き出すために臨床家がどのような言語行動をとればよいか、について示唆を与えること、そして(3) セラピーにおける言語行動に関心を持つ研究者のための方法論として参照してもらうことを目的としている。

現在、日本の臨床心理学では、学派間に共通する分析方法、あるいはプロセス比較のための共通した尺度がない。こうした状況をふまえて、本書は理論アプローチに中立的な言語分析が流派・アプローチ間の橋渡しとなることを方法論として提示している。同時に、言葉の使い方に関しての臨床家のトレーニングにおける有用な示唆・情報の提示ともなっている。（2016.4.25刊）

■『ナラトロジーの言語学 表現主体の多層性』
福沢将樹著 ひつじ書房（定価3,200円＋税）

言語学における語用論・統語論と文学理論におけるナラトロジー（物語論）とを融合し、「作者」「語り手」「視点」といった「表現主体」の多層性（垂直分業）の観点と「人格」の乖離という概念を組み合わせた統一的な枠組みを構築する。この枠組みに基づき、嘘・虚構・お世辞、引用、時制のそれぞれにつき、様々な微妙な区別を図式化し、それらが相違を持つにもかかわらず類似することをも説明する。（2015.10.5刊）

■『日本語語用論フォーラム 1』加藤重広（編集）執筆者：天野みどり、尾谷昌則、呉泰均、加藤重広、澤田淳、首藤佐智子、滝浦真人、名嶋義直、山泉実。ひつじ書房（定価4,800円＋税）

今までの日本語の文法や談話の研究の中には、場面や文脈など語用論的な観点が既に含まれ、客観的に見て「語用論」的なものが多くあった。一方、語用論研究では欧米の研究の摂取を主軸にしており、日本語の「語用論」的な研究と触れあうことが少なかった。本書は、日本語の研究と語用論の研究が通じ合う広場（フォーラム）となることを目指し、新しい研究成果を紹介する。（2015.12.14刊）

■『雑談の美学—言語研究からの再考』村田和代・井出里咲子（編集）執筆者：東照二、井出里咲子、大津友美、岡本能里子、片岡邦好、白井宏美、菅原和孝、筒井佐代、平本毅、坊農真弓、堀田秀吾、村田和代、山内裕、山口征孝。ひつじ書房（定価2,800円＋税）

待望の「雑談」の言語学。雑談とは何か？雑談とそうでないものの境界線は？政治家の演説や裁判員評議、鮎屋のカウンターから、登山者仲間内のゴシップ、アフリカ、グイの人々の雑談のおしゃべり、LINEやチャット、手話による雑談的相互行為まで。人間社会を形づくる日常生活のさまざまな雑談の本質に切り込む実証的研究論文13編を収録。（2016.2.25刊）

■『コミュニケーションへの言語的接近（ひつじ研究叢書（言語編）第129巻）』定延利之（著）（定価4,800円＋税）

本書は、現代日本語の話しことばの観察を通じて、「コミュニケーションとはお互いを理解するためのメッセージのやりとりだ」といった言語研究に広く深く浸透しているコミュニケーション観の問題点を明らかにし、それに取って代わる新しいコミュニケーション観の姿を追求したものである。言語研究がコミュニケーション研究にどのように貢献でき、コミュニケーション—言語—音声をつなぐ架け橋となり得るかが具体的に示されている。（2016.3.16刊）

■Jaszczolt, Kasia M. *Meaning in Linguistic Interaction*. Oxford University Press. 2016.

This book offers a semantic and metasemantic inquiry into the representation of meaning in linguistic interaction. Kasia Jaszczolt's view represents the most radical stance on meaning to be found in the contextualist tradition and thereby the most radical take on the semantics/pragmatics boundary. It allows for the selection of the

cognitively plausible object of enquiry without being constrained by such distinctions as what is said/what is implicated or what is linguistic and what is extralinguistic. She argues that this is the only promising stance on meaning. The analysis transcends the traditional distinctions drawn, and traditional questions posed, in post-Gricean pragmatics and philosophy of language. It heavily relies on the dynamic construction of meaning in discourse, using truth conditions as a tool but at the same time conforming to pragmatic compositionality whereby aspects of meaning that enter this composition have very different provenance.

■Romano, Manuela and Maria Dolores Porto (eds.) *Exploring Discourse Strategies in Social and Cognitive Interaction: Multimodal and cross-linguistic perspectives (Pragmatics & Beyond New Series 262)*. John Benjamins. 2016

This volume offers readers interested in Discourse Analysis and/or Socio-Cognitive models of language a closer view of the relationship between discourse, cognition and society by disclosing how the cognitive mechanisms of discourse processing depend on shared knowledge and situated cognition. An inter- and multidisciplinary approach is proposed that combines theories and methodologies coming from Conceptual Metaphor Theory, Multimodal Metaphor Theory, Critical Discourse Analysis, Narratology, Systemic Functional Linguistics, Appraisal Theory, together with the most recent developments of Socio-Cognitive Linguistics, for the analysis of real communicative events, which range from TV reality shows, commercials, digital stories or political debates, to technical texts, architectural memorials, newspapers and autobiographical narratives. Still, several key notions are recurrent in all contributions -embodiment, multimodality, conceptual integration, metaphor, and creativity- as the fundamental constituents of discourse processing. It is only through this wide-ranging epistemological and empirical approach that the complexity of discourse strategies in real contexts, i.e. human communication, can be fully comprehended, and that discourse analysis and cognitive linguistics can be brought closer together.

■Yus, Francisco *Humour and Relevance (Topics in Humor Research 4)*. John Benjamins. 2016

This book offers a cognitive-pragmatic, and specifically relevance-theoretic, analysis of different types of humorous discourse, together with the inferential strategies that are at work in the processing of such discourses. The book also provides a cognitive pragmatics description of how addressees obtain humorous effects. Although the inferences at work in the processing of normal,

non-humorous discourses are the same as those employed in the interpretation of humour, in the latter case these strategies (and also the accessibility of contextual information) are predicted and manipulated by the speaker (or writer) for the sake of generating humorous effects. The book covers aspects of research on humour such as the incongruity-resolution pattern, jokes and stand-up comedy performances. It also offers an explanation of why ironies are sometimes labelled as humorous, and proposes a model for the translation of humorous discourses, an analysis of humour in multimodal discourses such as cartoons and advertisements, and a brief exploration of possible tendencies in relevance-theoretic research on conversational humour.

■広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報をお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

Email: Syugo Hotta (堀田秀吾) at hotta@meiji.ac.jp

～編集後記～

今年は5月でも各地で30度を超える日があったりするなど、季節感が失われつつあり、日々の気温差などから、なにかと体調も崩しがちですが、会員の皆様にはますますのご健勝・ご活躍を願いつつ、ここに NL35 号をお届けいたします。本号では、第19回大会のお知らせを掲載しております。会員の皆様からの発表ご応募をお待ちしております。また、メタファー研究会の報告を掲載いたしました。今後も、単なる事務局からのお知らせだけではなく、何か会員の皆様からの声をお届け出来たらと思っております。ニューズレターにご投稿ご希望の方は、どうぞ担当者までお知らせ下さい。(堀田秀吾 記)

[広報委員]

- * 委員長：山岡政紀
- * Newsletter 編集担当：
鈴木光代、堀田秀吾